

侍従川に伝わる 照手姫伝説



WAKINOYATO

【まえがき】

室町時代、小栗判官満重は、盜賊の横山大膳に命を狙われ、毒に倒れます。囚われの身だった照手姫に救われます。逃がされた姫は侍従川に投げ込まれるも観音様の加護で生還します。満重は熊野の湯で蘇り、やがて照手姫と再会して結ばれます。

話の舞台は、現在の神奈川県藤沢市西俣野（にしまたの）付近と考えられています。この辺りには、小栗塚之跡や土震塚（すなふるいつか）が残っています。

照手姫は、藤沢から鎌倉を経て朝比奈峠を越えて金沢の地に来たのだと思います。今から六百年前、中国との交易が盛んだった六浦湊はたいへん繁栄していた場所だったのでないかと推測されます。

この小冊子は、遊行寺の長生院が発行している「小栗判官一代記略図」を基にして作成しています。



昔、常陸（ひたち）国、真壁郡の小栗（現茨城県真壁郡協和町）に、小栗判官満重（おぐりほうがんみつしげ）という大名が住んでおりました。今から六百年前の応永の頃、当時、関東管領として相模の地を治めていた足利持氏（もちうじ）に謀反の疑いをかけられ、鎌倉から討手を向けられ、ついに攻め落とされてしまいました。満重は十人の家来とともに三河国（現愛知県）を目指して落ちのびて行きました。



満重たちが藤沢の宿まで来た時には夜になってしまいました。そこで、『横山』という、今の戸塚のあたりの宿屋に泊まることにしました。

ところが、宿屋の主人の横山大膳（よこやまだいぜん）は、この辺りを荒らしまわる盜賊の首領だったのです。



横山大膳は満重たちから金品を奪うことを考え油断させて身ぐるみをはぐために一番良い部屋に通し、お酒をすすめました。余興で『鬼鹿毛（おにかけ）』という、日本一の暴れ馬を差し向け大けがを負わせることを企てました。しかし、馬乗りの名手であった満重は庭先を自由に乗り回し曲芸までやってのけました。



横山大膳は美しく着飾った遊女たちを呼び、満重たちに毒の入ったお酒をすすめさせました。女たちの中にひとり美しい娘がありました。その名を照手姫といいました。照手姫は、北面の武士の娘でしたが若くして父と死に別れ、訳あって大膳に仕えていました。遊女たちの執拗な手練手管の末、毒杯を飲まされて家来たちは殺されてしまいました。満重は、思いを寄せていました。



照手姫の耳打ちでかろうじて命を救われましたが、瀕死の病人となり家来らとともに上野ヶ原に打ち捨てられました。

その晩のことです。藤沢の遊行寺の大空（たいくう）上人の夢枕に、えんま大王が現れ、使者に託した手紙を読むよう告げました。ほどなくして使者が現れ、一通の手紙を阿弥陀堂に置いていきました。上人がその手紙を開いてみると、そこにはこう記されていました。

「上野ヶ原に十一人の屍が捨てられている。そのうち小栗判官満重のみは助かる見込みがある。熊野の温泉に浸せば命は救われるであろう。必ず助けるように。」

まさに天の知らせとも言えるお告げでした。

さっそく上人さまが弟子たちを上野ヶ原へ向かわせると、そこは犬が吠え、カラスが群がる、まさに地獄絵図のような光景が広がっていました。

えんま大王の使者からの手紙のとおり、十一人の屍が横たわっており、その中で小栗判官満重だけが、かすかに息をつないでいたのです。



上人さまは家来たちを遊行寺で手厚く葬り、満重を寺へと連れ帰りました。

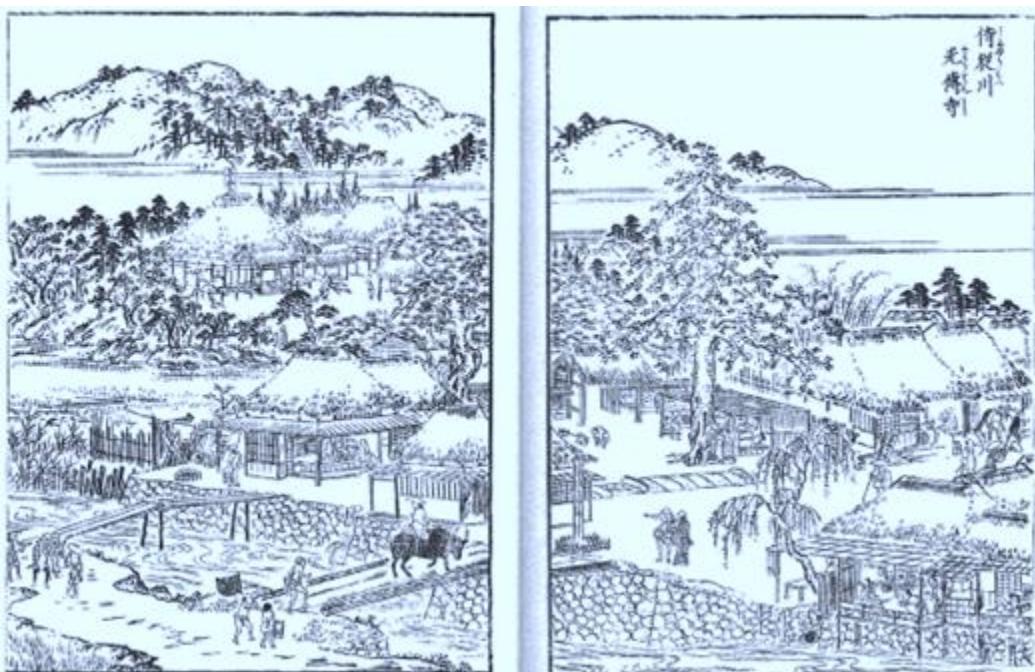
満重は、かつての面影が分からぬほどにやせ細り、無残な姿になっていました。

大空上人さまの弟子たちは、満重を餓鬼阿弥（がきあみ・生者と死者の間のもの）というみにくい姿のまま土車に乗せました。胸には、（この者を熊野の七色に変わる温泉に浸けて元の姿にせよ）という、えんま大王が書いた札をぶら下げていました。



照手姫は藤沢から逃げる途中、六浦で捕らえられ、侍従川に投げ込まれてしまいました。しかし、照手姫が唱えた念佛に応えて観音様が救いの手を差し伸べ、姫は野島の漁師によって助けられました。

「侍従川」の名は、このとき照手姫が川に投げ込まれたのを悲しんで油堤という淵に入水して命を落とした侍従に由来するそうです。



助けられた照手姫は、漁師の女房の嫉妬から松に吊るされ、命を奪われそうになりますが、再び観音様の加護によって難を逃れました。金沢八景に残る「姫小島」は、その伝承の舞台とされています。



その後、照手姫は人買いに売られ、美濃国（あおはか）の青墓（あおはか）で厳しい苦役の日々を過ごしました。それでも信仰を忘れず、ただ満重の無事を願い続けました。ある日、人々に助けられながら土車に乗せられ熊野へと向かう餓鬼阿弥に変わり果てた満重の姿がありました。

道すがら、その車の身元を知らぬまま供養の一心で引いたのは、なんと照手姫でした。



ついに熊野の七色に輝く湯に入り、満重は奇跡的に回復しました。満重は十人の家来を殺した横山大膳の仇を討ち、長い苦難の末に照手姫を探し出して再会しました。二人はようやく結ばれて幸せな日々を送りました。

満重が亡くなった後、照手姫は二度も命を助けられた観音様に帰依して仏門に入り、遊行寺内に草庵を営んでいましたが、永享元（1429）年に長生院を建てお念佛を広めました。



照手姫を救った観音様は「身代わり観音」として、千光寺に伝わる千手観音菩薩の胎内仏として祀られています。千光寺は明徳5(1394)年に侍従川のほとりに創建された浄土宗のお寺で、昭和58(1983)年に六浦から東朝比奈へ移転しました。

照手姫の墓がある藤沢の遊行寺は、踊り念佛で有名な時宗の総本山です。寺には、小栗満重と十人の家来、暴れ馬「鬼鹿毛」が照手姫とともに静かに眠っています。

この物語は、死と再生、夫婦の深い愛と献身をテーマにしており、どんな苦難の中でも希望を捨てずに、観音様の教えを信じて一心にお祈りすれば、必ず願いは叶えられるということを伝えています。

【照手姫の旧跡とお墓】



金沢八景に残る姫小島の碑



姫小島と水門跡



遊行寺の小栗判官墓所の石碑



小栗満重と十人の家来の墓



照手姫の墓



照手姫ゆかりの長生院

【参考】

・藤沢を知る「小栗判官・照手姫」 藤沢市教育文化センター
<https://www1.fujisawa-kng.ed.jp/kyobun-c/index.cfm/11,3279,68,html>

・侍従川の名前の由来と照手姫伝説 大道町内会ホームページ
<https://daido-net.sakura.ne.jp/wp/2020/05/25/terutehime/>

・小栗判官と照手姫伝説 八柳 修之
<http://shonan-fujisawa.jp/archives/H190612.html>

・図版 長生院「小栗判官一代記略図」
・写真撮影 廣瀬隆夫

侍従川に伝わる
照 手 姫 伝 説
編者 廣瀬隆夫

令和七年十二月十三日 初版 発行
発行所 わきの谷戸
〒236-0035 横浜市金沢区大道 1-14-6

PDF 書籍発刊に際して

地球上にアメーバのような単細胞生命が誕生してから、私たち人間がこうして文章を綴る存在へと進化するまでには、実に三十八億年という気の遠くなるような時間が流れています。

グーテンベルクが活版印刷を発明して以来、書籍は企画・構成・執筆・編集・デザイン・組版・印刷・製本という複雑な工程を経て、ようやく形を成すものでした。当然ながら費用もかかり、限られた人にしか出版という行為は開かれてていませんでした。

しかし、私たちはコンピュータという新しい道具を手に入れました。100年の進化の果てに高性能のパソコンとなり、いまや一人ひとりが扱えるまでに小さく、身近な存在となりました。

今では、アイデアさえあれば、ワープロで文章を打ち、校正し、印刷すれば、プリンターのインクと紙代というわずかな費用で一冊の本を作ることができます。この本はパソコンのワードと PDF を使って制作しました。

みなさんも、ぜひご自身で本を作り、世界に一冊だけの「言葉のかたち」を生み出してみてはいかがでしょうか。

